

# 『心』論——關係の不在——

徳永光展

## 一

先生の遺書（五十五―百十）を読む時、注意しなければならな  
いことがある。それは、この文章が先生の主観で貫かれていると  
いうことだ。故郷のこと、御嬢さんとの恋、Kのこと、それらは  
すべて先生の論理・解釈を通して読者「私」に提出される。「真  
面目に人生から教訓を受けたい」からこそ、「先生の過去が生み  
出した思想」（三十一）を知りたいと絶叫した「私」は、この遺  
書を深刻に受けとめるだろう。事実、深刻に受けとめたからこそ  
「私」の語り（一―五十四）が存在しているのではないか。そう  
でもしなければ心の整理がつかないところまで「私」を追いやっ  
たのではないか。遺書は確かに壮絶であり、真実として尊重され  
ねばならないが、それは先生の極めて主観的なものであるが故に、  
検討し直してみる余地はあるように思うのである。

先生は元来鷹揚な性格だったが、叔父の裏切りによって財産を  
奪われたことから人生が狂い始めたと振り返る。しかし、遺書に  
は従妹との結婚を勧められたことしか詳しくは書かれていない。  
叔父がどのような手順を踏んで、先生の財産を処理したかははっ  
きりと書かれていない。その理由を先生は「遺憾ながら私は今そ

の談判の顛末を詳しく此所に書く事の出来ない程先を急いでるま  
す。実をいふと、私は是より以上に、もつと大事なものを控えて  
ゐるのです。私のペンは早くから其所へ辿りつきたがつてゐるの  
を、漸との事で抑え付けてゐる位です。」（六十二）としている。  
これはある意味では当然であろう。叔父に誤魔化されて人間不信  
になったという前提がなければこの遺書、さらには「私」と関わ  
る際（一―三十六）に見せる先生の不機嫌な態度は成立しない。  
自己を正当化するためには、どうしても叔父を悪者に仕立て上げ  
なければならぬわけである。

その結果、このことについては「一口でいふと、叔父は私の財  
産を胡魔化したのです。事は私が東京へ出てゐる三年の間に容易  
く行なはれたのです。」（六十三）とあるのみであって、読者はこ  
れを事実として受け入れるよう求められる。だが、考えてみれば、  
当時先生は高等学校に在籍するまだ大人とはとても言い得ない存  
在である。しかも家のことは叔父に任せてでも勉強に専念しなけ  
ればならない身であった。事業家で、県会議員にもなり、政党に  
も縁故がある（五十八）叔父の人生経験、社会体験の豊富さとは  
比べようもない。職業柄、金の動かし方について叔父はかなりの  
能力を持っていたことが推察される。遺書には誤魔化されたこと

に対する先生の怒りが表明されているだけであって事の成り行きは分らない。それに叔父にも言い分があると思われるが、彼がこのことをどう考えているかも書かれていない。もし、「私」が遺書を持って新潟にいる叔父を尋ね先生について意見を求めたら、案外的を得た先生批判が飛び出すかもしれないようにも見えるのである。この時の先生の態度に問題があったのではないかという見方を裏付けるのに適当と思われる次のような表現がある。

私と叔父の間に他の親戚のものが這入りました。その親戚のものも私は丸で信用してゐませんでした。信用しないばかりでなく、寧ろ敵視してゐました。私は叔父が私を欺むいたと覺ると共に、他のものも必ず自分を欺くに違ないと思ひ詰めました。父があれ丈賞め抜いてゐた叔父ですら斯うだから、他のものとはいふのが私の論理でした。(六十三)

先生が感情的になつてゐたことが窺える。もし本当に先生が事実を認識してゐたなら、「他の親戚」と腹を割って話し合い、解決を模索してもよかつたのではないか。そうすれば、「所有にかゝる一切のものを」「黙つて」「受け取るか、でなければ叔父を相手取つて公け沙汰にするか、二つの方法しかなかった」(六十三)というような苦しい事態も或いは避け得たのではないか。

そうやってみていくと、問題にされるべきは先生の硬さにあるように思われてくるのである。同じことは、その後の先生にも指摘し得る。先生にまつわる人間関係のすべてに硬さを認め得るのである。

私の気分は国を立つ時既に厭世的になつてゐました。他は頼りにならないものだといふ觀念が、其時骨の中迄染み込んでしまつたやうに思はれたのです。私は私の敵視する叔父だの叔母だの、その他の親戚だのを、恰も人類の代表者の如く考へ出しました。汽車へ乗つてさへ隣のものゝ様子を、それとなく注意し始めました。(六十六)

先生のこの絶望的な気分が彼を破滅に追い込んだも同然であつた。故郷を捨てた時点で過去は過去、現在は現在と割り切つてしまひ得たなら、救われる道もあつたであらう。だが、先生にはそれができなかった。先生の悲劇の根源は過去に縛られ続けた点に認められるに違いない。

## 二

その後、先生が居を落ち着けた場所は軍人の遺族が住む素人下宿であつた。母と一人娘だけのその家にあつて、先生は次第に落ち着きを得るようになる。氣が付いた時には御嬢さんを異性として激しく意識してゐたのであつた。御嬢さんを我が物にしたいと強烈に思ひながらも、その氣持を伝えることができないうちに時が過ぎていく。その理由を先生はどのように理解してゐたか。

断られるのが恐ろしいからではありません。もし断られたら、私の運命が何う変化するか分りませんけれども、其代り今迄とは方角の違つた場所に立つて、新らしい世の中を見渡す便宜も生じて来るのですから、其位の勇氣は出せば出せたので

す。然し私は誘き寄せられるのが厭でした。他の手に乗るのは何よりも業腹でした。叔父に欺まされた私は、是から先何んな事があつても、人には欺まされまいと決心したのです。

(七十)

右の記述を見る限り、先生が御嬢さんに対して「殆んど信仰に近い愛を有つてゐた」(六十八) というのは額面通り受け取れないことが分かる。信仰とは理屈抜きに信じることである。自己の信念や主義を犠牲にしても賭けることである。先生は御嬢さんをそのような気持ちで見ているとすれば、右のような懷疑的な言葉が飛び出すはずはないのである。先生は御嬢さんへの「宗教心」(六十八) を信じ切れてはおらず、それ故告白は成し得ないのである。

「奥さんの態度を色々へ総合して見て、私が此所の家で充分信用されてゐる事を確かめ」(六十九) たのならば、そこに飛び込んでもよかつたのではないか。この親子を信じてすべてを託してもよかつたのではないか。

事実、先生は奥さんが先生を娘の夫として考えだしている様子に気付いている。そのことは、「奥さんの様子を能く観察してゐると、何だか自分の娘と私とを接近させたがつてゐるらしくも見える」(六十八) し、日本橋へ外出した時のことを級友にからかわれたと話すと「奥さんの眼は充分私にさう思はせる丈の意味を有つてゐた」(七十二) と先生自身が認めていることから容易に推察できよう。

さらには御嬢さんが実は先生に思いを寄せていたことも先生には直観的に理解されている。続いてこんな表現が見受けられるか

らである。

さつき迄傍にゐて、あんまりだわとか何とか云つて笑つた御嬢さんは、何時の間にか向ふの隅に行つて、脊中を此方へ向けてゐました。私は立たうとして振り返つた時、其後姿を見たのです。後姿だけで人間の心が読める筈はありません。御嬢さんが此問題について何う考へてゐるか、私には見当が付きませんでした。御嬢さんは戸棚を前にして坐つてゐました。其戸棚の一尺ばかり開いてゐる隙間から、御嬢さんは何か引き出して膝の上へ置いて眺めてゐるらしかつたのです。私の眼はその隙間の端に、昨日買った反物の端を見付け出しました。私の着物も御嬢さんのと同じ戸棚の隅に重ねてあつたのです。

(七十二)

一方、御嬢さんは御嬢さんで先生の気を引くべくいささかコケティッシュな振る舞いを見せている。Kと二人だけで家にいたことに心を掻き乱される先生のすべてを知っているかのように笑ひだし(八十、八十一)、外出先でKと一緒に二人で帰つて来るところを先生に見られた時には「心持薄赤い顔」(八十七) になるし、帰宅後先生からそのことについて問われると先生の「嫌な例の笑ひ方」をして「何処へ行つたか中てゝ見ろ」(八十八) と焦らしてみたりする。自らを試されているかのように感じる先生は不快感を感じないわけにはいかない。しかし、母子ともどもが先生を待っているかのように思われる様子を十分感ずることが出来るのだから、告白してしまうべきだつたように見えるのである。

先生は言う。「私は思ひ切つて奥さんに御嬢さんを貰ひ受ける話をして見やうかといふ決心をした事がそれ迄に何度となくありました。」(七十)と。そして、Kと共に暮らすようになった後でも「私はそれ迄躊躇してゐた自分の心を、一思ひに相手の胸へ擲き付けやうかと考へ出しました。私の相手といふのは御嬢さんではありません、奥さんの事です。」(八十八)と言う。なぜ、御嬢さんではなく、奥さんなのか。愛する本人に言うという発想がないのか。

肝心の御嬢さんに、直接此私といふものを打ち明ける機会も、長く一所にゐるうちには時々出て来たのですが、私はわざとそれを避けました。日本の習慣として、さういふ事は許されてゐないのだといふ自覚が、其頃の私には強くありました。然し決してそれ許が私を束縛したとは云へません。日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合に、相手に気兼ねなく自分の思つた通りを遠慮せずに口にする丈の勇氣に乏しいものと私は見込んでゐたのです。(八十八)

情が高まれば、習慣などものの比ではないのではないか。西洋の哲学・思想をいち早く学んだ学生ともなれば、日本の習慣の近代性を批判的に見るだけの視野はあつたはずである。その後、先生は奥さんに御嬢さんを妻としたい旨を伝えることになる。結局、結婚するまで、或いは結婚後も静とは深い感情交流のある会話は見られないのである。これで愛していると云えるのか。とても言えはしない。愛する以前の問題として静を自らと対等の人格を持った人間として受け入れるという発想がないと結論付けない

わけにはいかないのである。

出発点がこのようであり、そしてその後もこの態度が改められないならば、先生と静の結婚生活に影が射すのはやむを得ない。先生は結婚後、不愉快な気分悩まされ続ける。

私は妻と顔を合せてゐるうちに、卒然Kに脅かされるのです。つまり妻が中間に立つて、Kと私を何処迄も結び付けて離さないやうにするのです。妻の何処にも不足を感じない私は、たゞ此一点に於て彼女を遠ざけたがりました。(百六)

妻の存在が自殺したKを思い出させる、だから始終落ち着けないと先生は自己分析している。あたかも他人事のように、妻に責任を押しつけるかのような言い方ですらある。静にしたって、Kの死が先生に打撃を与えたことぐらひは知っている。「Kさんが生きてゐたら、貴方もそんなにはならなかつたでせう」(百七)という言葉の前にして、「理解させる手段があるのに、理解させる勇氣が出せないのだと思ふと益悲しかつた」(百七)と先生は振り返る。なぜ勇氣が出せないのか。自分の過ちを妻に見せたくないという自尊心が核を成していることは言うまでもない。が、夫婦の生活とは良いところも悪いところも全部曝け出して本音で異なる個性がぶつかる中で、その絆を深めていくものなのではないか。自分の欠点を露呈することに極めて臆病な様子は、例えば『彼岸過迄』の千代子に対する須永の態度の延長線上に位置するものだが、須永が決して千代子と結ばれ得ない如く、先生も静と本当の意味での夫婦には成り得ないのである。

先生と静の間には子供がない<sup>①</sup>。「天罰だからさ」(八)と先生は



言うが、これは『門』で易者が御米に放った言葉を思い出させる。<sup>(2)</sup>

二人の性生活の有無をどのように理解するかは読者に委ねられた問題であるが、それが通常の夫婦のようにはなされなかったという読みも許されると思う。ならば、先生は性を伴った女として見ていないことになるのである。人格を持った対等の人間としても、性を持った女としても意識されないなら、しかも離れられない異性関係だとするならば、悲劇的な様相を呈してくるより他ないだろう。先生は静の精神的支えとは何ら成り得ず、彼女の献身的な情を一方的に吸い取るだけの関係に終始してしまうからである。

### 三

Kと先生の関係にも不思議な印象は否めない。Kと先生は幼少の頃からの友達だったということになっている。少なくとも先生はKを友達だと表明している。Kの実家に手紙を書いたり同居をもちかけたり、ひいては御嬢さんにKと話をしてみようという頼んだりするのも全くそのために他ならない。Kが奥さんや御嬢さんと打ち解けてくるのを見て喜んだりもする。親切そうな先生の子は確かに伝わってくるが、それだけで果たして済ませられるものなのか。その後、先生は嫉妬の感情に悩まされ始める。

私はたゞでさへKと宅のものが段々親しくなつて行くのを見てゐるのが、余り好い心持ではなかつたのです。私が最初希望した通りになるのが、何で私の心持を悪くするのかと云はれ、ば夫迄です。私は馬鹿に違ないのです。(八十一)

「馬鹿」と言つてしまえばそれまでだが、この中身を解析することは無意味ではあるまい。御嬢さんへの思いは一目惚れだったと先生は振り返る。事実、日本橋へ三人で外出した時、御嬢さんは「往來の人がじろじろ見て行く」(七十一)ほど華やいだ存在だったし、「奥さんは口へは出さないけれども、御嬢さんの容色に大分重きを置いてゐるらしく見え」(七十二)た。男性を魅了せずにはおかぬ御嬢さんにKが取り付かれる可能性は十分予想し得るはずである。にもかかわらず、先生は「Kは元来さういふ点にかけると鈍い人なのです。私には最初からKなら大丈夫といふ安心があつたので、彼をわざ／＼宅へ連れて來たのです」。(八十二)と述べている。

これはKを性を持った人間として意識していないことを意味する。「人間らしく」(七十九)しなければならぬとも先生は言うが、この言葉に先生のKに対する隠された評価が潜んでいるように思われる。

私はしきりに人間らしいといふ言葉を使ひました。Kは此人間らしいといふ言葉のうちに、私が自分の弱点の凡てを隠してゐると云ふのです。成程後から考へれば、Kのいふ通りでした。(八十五)

人間らしくないというのは考えてみれば、相手の人格を認めない侮辱した表現である。とすると、友達であるとはいひながら相手より優位な立場にあることに先生は自信を持っていると見なければなるまい。そうだったからこそ、Kとの同居に踏み切れたの

である。Kの学究的・求道的な態度に敬意を払ってはいても、自分の方が広い視野を持っていると考えた先生はその後報いを受けることになるのである。Kの告白は結果的には先生への報復であった。

この報復は先生にとって晴天の霹靂であつたようで、その後の先生はもはや平生の精神状態を保つことができない。しかし、これは自らが蒔いた種が芽を出したというより他ないであろう。奥さんに御嬢さんを下さいと言おうと思いつつ、その日を延ばしていく先生はその理由をこう述べる。

Kの来ないうちは、他の手に乗るのが厭だといふ我慢が私を抑え付けて、一歩も動けないやうにしてゐました。Kの来た後は、もしかすると御嬢さんがKの方に意があるのではなからうかといふ疑念が絶えず私を制するやうになつたのです。

果して御嬢さんが私よりもKに心を傾むけてゐるならば、此恋は口へ云ひ出す価値のないものと私は決心してゐたのです。

(八十八)

これは取り越し苦労に過ぎない。御嬢さんも奥さんも気持ち先生に あつた。先生もそれを予感してゐた。それでよいのである。そこに不純な策略を勘繰る必要はあるまい。しかしこのような発想を取る限り先生は御嬢さんに恋の告白を決して成し得ない。

Kの自殺は先生に大きな衝撃を与えた。多くの人からKのその後を尋ねられる度に「早く御前が殺したと白状してしまへといふ声」(百五)に悩まされる先生は念願かなつて御嬢さんと結ばれても常に胸中に潜むKに脅かされる。罪の意識に凝り固まり、そ

こから自由たり得なかつた先生は明治天皇の崩御、乃木大将夫妻の殉死を契機に自殺を決意する。

が、この筋書きには二つの疑問を感じる。K自殺の原因を先生の解釈で捉えてもよいのかという問題、そして仮にそれを受け入れるとしてもそれではなぜ先生が静との結婚生活を長きに渡って継続し得たのかという問題に行き着かないわけにはいかない。

Kの遺書には「自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから自殺する」(百二)とあつてその最後には「もつと早く死ぬべきだのに何故今迄生きてゐたのだらうといふ意味の文句」(百二)があつた。先生はその言葉に締め付けられる。「薄志弱行」なのはKでなく、自分にこそ用いられるべき言葉だと感じる。もつと早く死んでいれば、唯一の友に恋する女性を奪われるなどというひどい仕打ちを受けずに済んだのに、と遺書の最後の言葉を解釈する。そして責任を深く感じる。

けれどもKの言葉を額面通り受け取る可能性も残されているのではない。あらゆる困難に堪え忍び、道を追求することに価値を置くKにしてみれば、先生の世話になつてゐること自体が矛盾の始まりであつた。先生の熱心な勧めを受けて生活を共にしてみると、その家には若い未婚の女性がいる。その女性と先生がどのような関係にあるかと居候の身にある者が口を挟むことなど許されない。そうは思つていても気持ちは乱れる。耐えかねて先生にその気持ちを訴えるや、先生の態度が急に硬くなる。数日後、奥さんを通して先生と御嬢さんが結婚する事実を聞かされる。へそだったのか。先生と御嬢さんはそういう間柄だったのか。そうとも知らず、先生にあんなことを告白してしまった自分は馬鹿だった。先生の友情に甘え、結果的には先生を苦しめていたのだ。経

済的に援助してくれている友の女を奪うことはできない……」  
— そのような解釈が許されるならばKが感じたものは激しい自責の念であったはずである。

養家と絶縁し、実家からも勘当の扱いを受けた時、夜学校の教師をしてでも己れを支えていこうと決意したものの、実際のKはセンチメンタルになり、神経衰弱の様相を呈し、未熟さを曝け出したのであった。この時点で自分はもう終わっていたとKが考えたとしても不思議ではない。深遠な思想も「家」の力に守られてこそ追求し得たと気付き、尊大な自分の行い・態度を深く恥じるだけの成長があったなら、それは当然自己否定の感情と隣り合わせであり得る。従って、Kの遺書の最後の部分を養家と絶縁した時、すでに生を終えるべきだったと素直に読むことも許されるはずである。すると、先生の解釈は余りに自虐的すぎるということになるのである。

遺書を書き継いできた先生は言う。

私はKの死因を繰り返し／＼考へたのです。其当座は頭がたゞ恋の一字で支配されてゐた所為でもありませんが、私の観察は寧ろ簡単でしかも直線的でした。Kは正しく失恋のために死んだものとすぐ極めてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分で、同じ現象に向つて見ると、さう容易くは解決が着かないやうに思はれて来ました。現実と理想の衝突、——それでもまだ不十分でした。私は仕舞にKが私のやうにたつた一人で淋しくつて仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑がひ出しました。

(百七)

遺書を書くという行為を通して先生の洞察は深化し、真相を探り当てたかに見えた。この解釈を信じるのができれば先生は自殺せずに生き続けることができたかもしれない。が、「他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつた」(百六)という先生にそれを信じ切ることなどできようはずがなかった。そこで自殺が頭をかすめるようになる。

このように見てくると、自殺がKの魂への謝罪として決行されたとはとても読めない。そうであるならKの死後、静との結婚生活がたとえ表面上に過ぎないものとはいえ幾年も継続したことを説明できない。先生はもっと早く死んでいなければならなかったはずである。先生の自殺はKのためではなく、純粹に先生の個人的な理由によるものと考えるべきである。内に潜む不愉快な満たされぬ気持ち、自らも含めて一切を信じられず、そのような気持ちで生き続ける苦痛にもはや耐え切れなくなった結果の自殺と解釈するのが無理のない見方であるように思われる。

#### 四

先生は静を残して世を去る。そのことに対して冷静な様子はむしろ不思議なくらいである。妻と共に心中することはできない(百九)とは言うが、自らの死が静に与える衝撃の大きさについては考えない。

私は妻を残して行きます。私がなくなつても妻に衣食住の心配がないのは仕合せです。私は妻に残酷な驚怖を与へる事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬ積です。

妻の知らない間に、こつそり此世から居なくなるやうにします。私は死んだ後で、妻から頓死したと思はれたいのです。気が狂ったと思はれても満足なのです。

(百十)

人の死が人の運命に影響を及ぼす。人の一生を支配し、転機を生じさせる。先生が今、死という選択へ辿り着いたのも人の死に源を発している。両親の死から人生が狂い始め、Kの死で一切の希望を剥脱され、明治天皇の崩御、乃木大将夫妻の殉死が自らの死を決行させる引き金となる。遺書執筆によって自分史を構築するという先生の営みは他者の死が自分に与えた影響の分析に他ならない。であるなら、先生は自己の死が他者に与える影響を考えたもよいのではなからうか。

結婚後、数年して静の母が亡くなる。先生に向かって「是から世の中で頼りにするものは一人しかなくなつた」(百八)と言つたことに象徴されるように、静は孤独感を深めていったに違いない。静にとって先生の存在の重みは計り知れないものがあつただろう。夫の自殺を静は気が狂つての頓死と割り切り、それを冷静に受け入れることができようか。とてもそのようには思えない。静は静で自責の念に憂慮し続けてきているからである。

「私はとう／＼辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく云つて下さい、改められる欠点なら改めるからつて、すると先生は、御前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にある丈だと云ふんです。さう云はれると、私悲しくなつて仕様がないです、涙が出て猶の事自分の悪い所が聞きたくなるんです」

(十八)

静は「私」にこのような悩みを打ち明けていた。先生が自殺すれば静はこの苦悩を一生背負い続けなければならない。先生の苦悩は死を境として静に転生し、彼女を苦しめるに違いないのである。ところが、そのことへの配慮は全くない。静もその母も終始先生に気持ちがあつた事実が遺書を書き継ぐ過程で理解されてきたというのに。妻のことを本当に真剣に考えるならば、死ねはしない。すると、やはりこの夫婦関係は不毛であると結論づけないわけにはいかない。

遺書に登場するのは先生の立場からみた信じられない人間関係——先生と故郷(両親、家)、先生と御嬢さん(恋)、先生とK(友)の関わりが主軸を成している。先生はもとよりKも静もそれ故に破局へ追い詰められる。そこには他者との間に「心」を通わせたいとの願望に突き動かされつつも、それが不能な関係が重層的に積み重ねられているが故の悲劇が確かに記録されているのである。

〔註〕

〔一〕西垣勤「『こゝろ』覚え書」

〔日本文学〕第二十卷九号一九七一・九

性の匂いがなく、子供ができるという設定がなく、さらに先生が静に秘密を打ち明けられないところから、結局先生夫婦には愛が成立していない、としている。

石原千秋「『こゝろ』のオイディプス」

〔成城国文学〕第一号 一九八五・三

「子供」ができないのは静の「処女性」の暗喩であつてもよ



いはずだ、との指摘がある。

小森陽一「『心』における反転する〈手記〉——空白と意味の生成——」(『成城国文学』第一号 一九八五・三)

「先生」の「奥さん」に対する「愛」において、(性・欲と生・欲)を排除された身体的領域、禁止と欠如の枠に囲い込まれた欲望と解釈している。

(2) 山崎正和「淋しい人間」(『ユリイカ』一九七七・十一)

「先生」の罪人としての生活は、じつに細部にいたるまで、『門』の宗助の生き方に似ている、との指摘がある。

(3) 猪野謙二「『心』における自我の問題」

(『世界』第三十六号 一九四八・十一 岩波書店)

〈一人の女をかれによって奪い去られたKの自殺の印象を、やがて「時」の力によって客観化することができたとき、先生は、かれの死をそうた易く失恋の結果に帰してしまうことはできなかった。その「理想と現実との衝突——それでもまだ不十分」だと考え、最後に「Kが私のやうにたった一人で淋しくつて仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうか」という、かれの孤独な人格主義的精進の破綻にその結論を見出すのであるが、合理的な個人主義の倫理からすれば、そこで先生はまったく友の死に対する負い目から解放されてもよい筈なのだ。しかし、かれは決してそのような理づめの判決に自らの救いを見出すことはできないのである。そこまで考えてきて、先生はかえって「慄とした」のである。〉

〔付記〕

本文の引用は『漱石全集 第九卷』(岩波書店 一九九四・九)

に依り、「[註]に掲げた文献は、玉井敬之・藤井淑禎編『漱石作品論集成 第十卷 こゝろ』(桜楓社 一九九一・四)に再録されているものに依拠したが、いずれもルビは省略している。

(とくなが・みつひろ)